

上顎左側第一大臼歯17回 (31.4%)、下顎右側第一大臼歯10回 (18.4%) などであった。診断名としては慢性根尖性歯周炎が98.1%と高率を示した。3) 使用目的では根管充填材の除去が他と比較して34.5%と有意に高い傾向を示し、治療目的と診査目的の使用の割合は約2:1であった。4) 顕微鏡の使用時間では、30分~1時間以内の者が84.6%と有意に高率を示した。5) 使用効果では、「満足」と回答した者が有意に高く、「不満」と回答した者は認められなかった。6) 「使用に際して難しいと感じたことはありましたか?」の問いには92.3%の者が「あった」と回答し、その理由としてミラーテクニックを用いた視認度が顕微鏡自体の使用法の難しさに比較して76.2%と有意に高い傾向を示した。7) 「今後、どのような治療で使いたいと思いますか?」の問いには「歯内治療」が100%と示し、次いで「歯内外科治療」、「歯周外科治療」および「う蝕治療」などがあった。8) 「顕微鏡を用いた治療と学生教育との関わりをどう思われますか?」の問いには「今は必要ない」と回答した者は認められず「将来必要になると思う」53.8%、「今から積極的に取り入れる」46.2%と「必要である」と考えられる回答が認められた。

【考察および結論】 1) 上顎歯は直視で見づらく、ミラーテクニックの使用においても限界があるため、下顎歯に比較して顕微鏡使用の必要性が高くなったことが考えられた。2) 使用目的は主に歯内治療や診査に用いられ、肉眼では確認できなかったものが確認できた、今後は他の治療でも使用したいとの回答から、今後の使用が期待された。3) 使用経験年数では1年未満の者が多く、新たに顕微鏡が導入されてから使用した者が多いことが考えられ、使用に際して難しいと感じた回答も多いことから、今後のスキルアップが課題であると思われた。4) 学生教育との関わりについては、「必要である」と考えられる回答が多く認められ、平成18年版の歯科医師国家試験出題基準においても「顕微鏡を用いた歯内療法」が明記されていることより、今後の学生教育に取り込んでいかななくてはならない内容であることが示唆された。

11) 本学附属病院歯内療法学分野における初診患者の臨床統計的観察

—平成20年1月~平成20年9月について—

○東田 大輔, 梅里 朋大, 平山 圭史, 六角 玲奈
田辺 理彦, 笹原 麻美, 佐藤 穂子, 森下 浩江
今井 啓全, 佐々木重夫, 木村 裕一

(奥羽大・歯・保存学)

【目的】 奥羽大学歯学部附属病院歯内療法学分野に依頼された初診患者の現状を客観的に把握し、今後の一助とすることを目的に当分野で担当した初診患者を対象に調査、検討を行った。

【調査対象および方法】 調査対象は平成20年1月から平成20年9月までの間に歯内療法学分野が担当した初診患者159名の診療録をもとに①年齢および性別 ②来院月、曜日、時間および居住地域 ③来院背景 ④職業 ⑤主訴 ⑥主訴部位 ⑦診断名 ⑧処置内容 ⑨全身疾患の項目について調査し、臨床統計的観察を行った。

【結果】 ①調査対象者の平均年齢は40歳3か月 (最年少; 13歳, 最年長; 81歳) で、20歳代の初診患者が40名 (25.2%) と最も多かった。また、男性53名 (33.3%) に比較して女性は106名 (66.7%) と男女比は1:2であった。②来院月は4月が33名 (20.8%) と最も多く、1月から3月までは少ない傾向にあった。来院曜日は月曜日が54名 (34.0%) と最も多く、月曜日に来院した初診患者が全体の約1/3を占めており、週末にかけて減少傾向がみられた。来院時間は午前10時台が44名 (27.7%) と最も多く、午前中に来院した患者が92名 (57.9%)、午後は67名 (42.1%) で朝早い時間帯での来院が多い傾向にあった。初診患者の居住地は郡山市在住が105名 (66.0%) と最も多く、80%以上の方が郡山市内とその付近から来院していた。③来院背景は初診での来院が82名 (51.6%) と最も多かった。④職業は会社員が66名 (41.5%) と最も多かった。⑤主訴は歯の痛み・違和感が126例 (79.3%) で最も多く、初診患者の80%近くが歯痛、違和感を主訴に来院していた。⑥主訴部位は下顎大白歯部が60例 (37.7%) で最も多く、次いで上顎大白歯部31例 (19.5%) であった。⑦診断名は慢性根尖性歯周炎が79例 (49.6%) で最も多く、根尖性歯周炎、

歯髄炎と診断されたものが全体の約70%を占めた。⑧初診時の処置内容は感染根管処置が74例(46.5%)で最も多く、次いで抜髄が20例(12.6%)であり、歯内処置を行ったものが全体の約60%を占めていた。⑨159名のうち、現在もしくは過去になんらかの疾患を有しているものは49名(30.8%)で、疾患は延べ55例を数え、高血圧症が21例(38.3%)で最も多く、次いで低血圧症7例(12.7%)、糖尿病5例(9.1%)、B型・C型肝炎、心疾患、精神・神経症状各4例(7.3%)、悪性腫瘍、貧血、甲状腺疾患各2例(3.6%)、血液疾患、呼吸器疾患、脳疾患、くる病各1例(1.8%)であった。

【考察および結論】 調査した9か月間における初診患者の動向として、1月～3月にかけて来院数が少なかった要因に気候の問題が考えられた。月曜日に来院数が多かった理由として、土曜、日曜日に不快症状を認め、改善しなかったことが来院に至った経緯であることが現病歴から判明した。また、午前中に来院数が多い背景としては、主訴内容からも推測できるように、痛みに対して早急な対応を要している患者の心理状態を反映していることが考えられた。臨床面において、歯内処置を必要とした例は約60%であり、次いで修復、歯周処置が多いことから、歯内療法学分野はもとより、修復学分野、歯周病学分野に対して、より学術的な理解を深めていく必要があることが示唆された。

12) 奥羽大学附属病院総合歯科保存学講座修復学分野における初診患者の臨床統計学的検討—2005年9月～2008年6月について—

○五月女 稔, 中島 宗隆, 中 貴弘, 安達 仁
篠島 美香, 土田 雄太, 金井 英納, 成井和貴子
高橋 一人, 大河内瑠夏, 松浦 芳久, 和田 隆史
金子 友紀, 西村 翼, 菊井 徹哉, 横瀬 敏志
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒言】患者の主訴や治療内容などを調査することは保存処置を始めとする歯科治療を行う上での指針となり、歯科治療の質の向上のために必要である。当分野では2005年9月より初診患者の調査を行っている。今回は2005年9月から2008年6

月までの当分野の予診診療を受診した患者を対象として、分析を行った。

【調査対象および項目】2005年9月から2008年6月までに修復学分野の予診診療を受診した患者を対象とした。患者は、初診患者、再来初診患者、他医院よりの紹介患者、他科よりの治療依頼患者に分類し、来院日、カルテ番号、患者氏名、年齢、性別、居住地、主訴、診断名、治療方針について調査した。

【結果】1) 該当期間中の患者数は514名、男女比4:6、2) 男性では20代、女性では30代が多かった。3) 来院患者の約80%は当院より半径30km圏内であった。4) 他院よりの紹介患者の比率は6%であり、他科よりの依頼患者の比率は14%であった。5) 痛みを主訴とするものが全体の54%であった。6) 診断名は、歯冠修復処置43%、歯内治療34%、歯周治療13%であった。7) 治療方針は、歯冠修復処置40%、歯内治療34%、歯周治療14%であった。

【考察】1) 女性が多く認められたのは、大学病院における診療時間に都合を合わせやすい女性が多く来院しているためと考えられる。2) 就学等で来院が制限される10代、欠損歯列を有する割合の高い高齢者では、少ない値を示した。これは、保存処置が主な治療内容とするためと考えられる。3) 特殊性の高い診療科に比べると紹介やその他特別な事情がある場合を除いて遠方からの来院は少ないと考えられ、紹介率はやや少なかったと考えられる。4) 主訴は、痛みが最も多く、次いで修復物脱離、歯肉腫脹、審美障害であり、当科の標榜とする保存処置の割合が高く、その中でも歯冠修復処置の割合が高いのは、修復処置を専門的に行う歯科医師が多く在籍しているためであると考えられる。

【まとめ】大学病院は歯科医師を養成するだけでなく、第二次、第三次医療機関として地域に密着した医療を行い主としてプライマリヘルスケアを担っている開業医への情報提供や歯科医療内容の提言を行うことも重要な任務である。当分野においても専門的な情報を積極的に公開していく必要があると考えられる。